

トップニュース

# 災害の経験を次につなげる「避難所」



東日本大震災が発生し3月11日で14年を迎える。あらためて震災の経験をつないでいこうと「避難所」を取り上げる。昨年1月1日に起きた能登半島地震から1カ月あまり、富山県氷見市姿地区の自主避難所の運営に携わった同地区の区長・山本譲治さん(65、高岡教区仏教壮年会連盟評議員)に、避難所の生活を振り返ってもらった。

## 能登半島地震から約1カ月間 区長として自主避難所を運営



山本 譲治さん 富山県氷見市・長福寺門徒

災害落農事集会所(写真左)を自主避難所として住民に開放したのは地震が起きた1月1日の夜。震度5強の強い揺れに見舞われ、3分の1の家が全半壊するなどの甚大な被害を受けた姿地区。能登半島の東側に位置し、富山湾に面しているため、地震直後に津波警報が発令された。高齢者のひとり暮らしも多くなり、山本さんたち区役員が、57軒すべてを訪ねて避難を呼びかけ、高台にそれぞれ避難。しかし、夜になると寒さが厳しくなってきたため、高齢者の体調を気づかい、地区の役員らと相談し農事集会所に避難することにした。「集会所は軽量鉄骨造りでエアコンも設置されている。市の指定避難所までは車で15分ほどかかる上、海岸線の道を通らなはいけない。それなら海から少し離れた地区の集会所の方がいいのでは」と、決断したと山本さんは振り返る。

役員で手分けし、住民たちには集会所を避難所にすることを知らせ、60人ほどが集まった。電気は通っているが水は出ない状況。余震による転倒の恐れから石油ストーブは使わず、エアコンで暖を取った。倒壊を免れた人が、米や正月で準備していた食べ物、ペットボトルの水などを持ち込んだ。ご飯を炊き、食べ物や飲み物を分けた。集会所の隅取りは30畳ほどの広間と6畳と8畳の部屋が1つずつ。座布団を布団代わりし、広間で重なるようにして不安な夜を過ごしたという。

夜が明け、それぞれが自宅に戻り、寝具や生活用品などを持ち寄った。だが、住民の表情は一様に厳しかった。山本さんは「自宅の惨状を目の当たりにしてショックを受けたのだと思う。だから、みんなを励ますために努めて明るく振舞おうと思った」と話す。

避難所運営は、山本さんと役員で話し合っ決めて決めた。水洗トイレなどのため、男性が2人ずつ交代で山の湧き水を汲みに行くようにした。また、車いすの高齢者のトイレ介助は男性2人で行った。

住民たちは、昼間はそれぞれ自宅に戻り、片付けなどをし、夜は集会所に戻るという生活を送った。食事が中心になって準備していた。指定避難所ではないため支援物資は届かず、3、4日後に山本さんは支援を市役所に求めた。「姿地区の様子を見てほしい」と訴えた。そこから、指定避難所と同じように支援物資も届くようになり、ボランティアによる炊き出しも行われるようになった」と話す。

# 本願寺新報

hongwanji journal

3月10日(月曜日)

毎月1日・10日・20日発行

発行所 本願寺新報社  
 京都市下京区堀川通花屋町下ル 浄土真宗本願寺派(西本願寺) 千600-8501 本願寺出版社内  
 電話 075(371)4171(代) / FAX075(341)7753

**茶道 敷内家燕庵**  
 京都市下京区西洞院正面下ル  
<http://www.yabunouchi-ennan.or.jp>

## 私たちのちかい

- 一、自分の殻に閉じこもることなく 穏やかな顔と優しい言葉を大切にします 微笑み語りかける仏さまのように
- 一、むさぼり、いかり、おろかさにならせず しなやかな心と振る舞いを心がけます 心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけを大事にすることなく 人と喜びや悲しみを分かち合います 慈悲に満ちみちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき 日々を精一杯つとめます 人びとの救いに尽くす仏さまのように

**赤光 白光**  
 今の日本の子どもたちは幸せだろうか。現況を見ると必ずしもそうとは言えない。厚生労働省が発表した、自ら命を絶った児童生徒数は過去最高となり、昨年1年間で527人に及んだという。子どもたちが幸せだと感じる社会にするために大人はどうしたらいいのか。

▼地域相談機関・児童家庭支援センターは、児童虐待の発生予防、親子関係の再構築などの家族支援、家族が抱える問題に寄り添ってその自立を支援している。その1つ、社会福祉法人・光明童園が運営する「オリーブの木」(熊本県水俣市)がユーザーで公開しているセミナー「みらいの子ども達に何を思う？」は、たくさんの示唆を与えてくれる。

▼児童養護施設も運営する同法人・堀淨信理事長(同市・西念寺僧徒)はセミナーで、「家族・保護者の幸せがないと子どもの幸せはない。虐待ではなく心配な家庭として、子どもと家族をまるごと支える地域支援が欠かせない」。さらに、「児童虐待、子どもの貧困の原因は社会の『家族依存』にあり、『子育ては親が行うべき』『子育ての全責任は親にある』という自己責任論から、社会全体で子どもを育むという価値観に変えていかないといけない」と。

▼その一歩は身近な所から。日常、幼い子どもを抱えて大変そうにしている人に出会うことがある。「子育て大変ですね」とつながっていくことが大事だということ。社会に蔓延する「つながりの貧困」からの脱却が、子どもが幸せになる道につながっている。

福岡支局 千812-0002 福岡市博多区空港前3-9-16 善教寺内 電話 092(621)5163/FAX092(621)9400 購読料1部120円(年間4,080円) 定期休刊 7月10日、12月10日 浄土真宗本願寺派 代表電話 宗務所 075(371)5181 / 大谷本願寺 075(531)4171

宗派公式Webサイト <https://www.hongwanji.or.jp>  
 本願寺ホームページ <https://www.hongwanji.kyoto>

# 「みんなで協力し避難所生活乗り切る」

きいていただいたのはありがたいと語る。当初は60人ほどだった避難者数も、1週間ほど経った頃から自宅に戻る人、親戚宅に移り住む人などが出始め、徐々に減っていき、全員が退所したのは2月6日だった。

避難生活中、住民間のトラブルなどはなかったという。山本さんは「同じ地区に暮らす、気心の知れた仲間同士だったのがよかったと思う。みんなで協力し合っって困難な状況を乗り越えようという前向きな姿勢がなかったら、大変なところだったと思う。また、皆さん、着の身のままで避難所に来られた。やはり避難バッグは準備しておかないといけないと感じた」と被災経験からの教訓を語る。

震災直時に勤務していた会社は避難所運営などで欠勤が多くなり、山本さんは「迷惑はかけられない」と昨年2月上旬に退社。4月からは14時半に退社できる別の会社に再就職し、姿地区の復興に尽力してきた。現在、区長経験者や地区役員などで作る姿復興の会の会長を務め、住民の相談に乗り、地区の道路などのインフラ修復について市と掛け合っている。

復興の会は昨年7月に結成し、毎月合会を開いている。57軒あった住宅は41軒に減り過疎・高齢化に拍車がかかるのではないかと心配している。海越しに3000以上の山が景観を世界で力所しきれない景観を、姿地区の復興に活用できないかなど意見を話し合っている。みんなが協力することで避難所生活も乗り切れた。この経験をもちに地区の復興も住民の知恵を結集して進めていければ」と話す。

## 寺院が指定避難所に

### 長崎市・教宗寺

地域と密接に関わる寺院が、災害時に市民の受け皿となるケースも少なくない。全国には行政の指定避難所になっている本派寺院もあり、長崎市の教宗寺(小笠利証住職)もその1つだ。

指定避難所のきっかけとなったのは1982年7月の長崎大水害。歴代最大の1時間雨量(180.7mm)を観測するなど集中豪雨と河川の氾濫で死者・行方不明者299人を出し、同寺でも門徒30人が亡くなった。高台にある寺は大水から逃れてきた住民であふれ、50人以上が1週間余りの避難生活を送ったという。

当時を知る小笠利証住職(60)は「備蓄していたお米やおにぎりを振る舞ったり、避難してこられた方たちと一緒に炊き出しをした。本堂は遺体を安置し、葬儀もあつたため、皆さんは書院の広間で寝泊まりされた。夏で布団の心配はいらなかったが、最も長い方は3カ月ほどおられたように思う。それから、台風などの際に自主的に避難して

指定避難所にはならなかったが、『ペットを連れて避難できる場所が近くになる』という方がいて、1組だけだったが利用していただいた」と続ける。

教宗寺の場合は、長崎市から日用品や救急セット、誘導用の蛍光ベストのほか、指定避難所開設時に設置する緊急電話などが支給されており、定期的に市の担当者が備品確認に訪れる。「避難所を開く場合は市の職員さんが電話の設置などをしてくれるので、そうした業務負担は減っている」という。

一方で「安心・安全に利用してもらえないように」と独自に工夫し、改善を重ねている点もある。「例えば、近年問題になっている避難所での性被害や盗難などの対策に、パーテーションで家族ごとスペースを仕切り、鍵付の扉を設けるようにした。また、住職が金品を管理する部屋で就寝したり、寺院のプライベート空間とは分けている。災害の心配があっても、避難するだけでもストレスは溜まるもの。無用なトラブルを避けるためにも準備や配慮は大切」という。

「地域の皆さんの安心できる居場所であることが元々のお寺の役割。だから、特別なことではないと思っっている」という小笠さん親子。もちろん災害が起きるに越したことはないが、大変な時にこそ、「仏さまに守られているように安心」という関わりができる」と話す。

# 大水害きっかけに避難者を受け入れ

指定避難所のきっかけとなったのは1982年7月の長崎大水害。歴代最大の1時間雨量(180.7mm)を観測するなど集中豪雨と河川の氾濫で死者・行方不明者299人を出し、同寺でも門徒30人が亡くなった。高台にある寺は大水から逃れてきた住民であふれ、50人以上が1週間余りの避難生活を送ったという。

当時を知る小笠利証住職(60)は「備蓄していたお米やおにぎりを振る舞ったり、避難してこられた方たちと一緒に炊き出しをした。本堂は遺体を安置し、葬儀もあつたため、皆さんは書院の広間で寝泊まりされた。夏で布団の心配はいらなかったが、最も長い方は3カ月ほどおられたように思う。それから、台風などの際に自主的に避難して

指定避難所にはならなかったが、『ペットを連れて避難できる場所が近くになる』という方がいて、1組だけだったが利用していただいた」と続ける。

教宗寺の場合は、長崎市から日用品や救急セット、誘導用の蛍光ベストのほか、指定避難所開設時に設置する緊急電話などが支給されており、定期的に市の担当者が備品確認に訪れる。「避難所を開く場合は市の職員さんが電話の設置などをしてくれるので、そうした業務負担は減っている」という。

一方で「安心・安全に利用してもらえないように」と独自に工夫し、改善を重ねている点もある。「例えば、近年問題になっている避難所での性被害や盗難などの対策に、パーテーションで家族ごとスペースを仕切り、鍵付の扉を設けるようにした。また、住職が金品を管理する部屋で就寝したり、寺院のプライベート空間とは分けている。災害の心配があっても、避難するだけでもストレスは溜まるもの。無用なトラブルを避けるためにも準備や配慮は大切」という。

「地域の皆さんの安心できる居場所であることが元々のお寺の役割。だから、特別なことではないと思っっている」という小笠さん親子。もちろん災害が起きるに越したことはないが、大変な時にこそ、「仏さまに守られているように安心」という関わりができる」と話す。

京ゆば 湯葉 弥

京・五条御前東 電話075-111-5788  
<http://www.yubaya.co.jp>

創業元禄初年 大笹屋

京都市左京区聖護院蓮華蔵町3-6  
 TEL 075-751-6889  
 FAX 075-751-7304  
 E-mail:m@ozasaya.com

施設管理は、オリックス・ファシリティーズ株式会社

本店 千600-8385  
 京都府京都市下京区大宮通仏光寺下五坊大宮町9-9  
 TEL 075-8411-7550(代表)  
 FAX 075-8411-7666

加羅 沈香・線香・匂い袋 香老舗 創業文禄三年(1594年)

薫玉堂

千600-8349 京都市下京区堀川通西本願寺前  
 電話075-3771-0166

ロングセラー書籍! 仏教が楽しくなる本!

くらしの仏教語豆事典

〈上巻〉276頁 / 〈下巻〉240頁 / 文庫判 各 1,100円(税込)  
 文 辻本 敬順 絵 寄藤 文平

私たちのくらしの中に溶け込んでいる 日常語の元をたどれば、  
**あれも、これも、 仏教語だった!!**

いままで知らなかった、ことばの「ほんとう」の意味をわかりやすく解説した全225話。日本のくらしと仏教がいかに関連深いかかわかります!

本願寺出版社 0120-464-583 075-341-7753  
 千600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル(西本願寺) <https://hongwanji-shuppan.com/>